変態と暴力幼馴染

zens

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
変態と暴力幼馴染

【Ｎコード】
Ｎ５９３９Ｉ

【作者名】
ｚｅｎｓ

【あらすじ】
前向きでタフな変態とその変態を放置して出来ない暴力的な、ある意味正義感?の強い、出っ張った幼馴染との話。

近年問題になっている少子化。
昔は、5クラスあった小学校も今では、1クラスなんてこともざらじゃない。
子供の数が少ないのは将来の日本のためにもならない。1組の夫婦が最低2人は子供を作らないと人口は維持できないという。要するにセックスして子供作れってことだな。

「と、いうことで子供作ろうぜ」
「そんなに気安く言うな、この変態っ」
「わーおっ」

今日も自称俺の嫁は絶好調。学校内でも俺は将来の日本を憂いているというのに、幼馴染は本当に自分のことしか考えない奴だ。周りのクラスメイトはまた始まったと言わんばかりに食事に励んでいる。

「だいたい誰が妻よ、正妻よ、許嫁よ！　まだ彼女よ、私」
「あ、なんだ、そういう日じゃないの、ふぐおっ！　みぞおちやめて」

相変わらず、こいつの拳はやばい。どうして、胸の脂肪は年々大きくなるのに、パンチの早さは一向に衰えるどころか、むしろ早まるのか。男の股間をもっこりさせる山のような胸は邪魔じゃないのか。これはもう胸に秘密があるとしか思えない。まずは目視で対象を研究せねばならん。

「……。お嬢さん、素敵なおっぱいですね。色艶形大きさ柔らかさ

全て良し」
「じっと人の胸を凝視するんじゃなーーーーーーーーーーーーいっ」
「ぎゃあああああああっ」

こうやって何度も一方的に殴られていると、俺がMだとか、また女の暴力はいいのかと言う人がいるかもしれない。
しかし、それは違う。昼は鏡子が、夜は俺が主導権を握るのだ。日が上がっているうちが彼女の天下に過ぎない。くくく、夜はあひんあひん言わせてやろう。

と、妄想だけが膨らむ。実際は熟年夫婦のようにセックスレスです、はい。

……む、いけない。ここは1つかっこいいことを言って、気持ちを改めねば。

「お前に殴られるその瞬間に躍動し、揺れる胸が見えるのが好きなんだ」

決まった！

俺は刹那の色気を追い求める紳士。おっぱいの探究者である。おっぱいの魅力にとり憑かれ、今日も最高のバストの持ち主、幼馴染の大島　鏡子のおっぱいを追う。
しかし、俺とは違い、鏡子は呆れたように首を横に振った。あ、おっぱいが揺れた。

「0点。はあ、どうして、あんたと私、こんな腐れ縁なんだろう」
「俺のことを信頼してくれ！」

「いや、意味分かんないし、無理。私のこと見なくなったら、あんた他所の子のとこ行くでしょ」

一応、彼氏なんだけどな、俺。

自分で言うのもおかしいが、鏡子はこんな変態野郎とよくも律儀に付き合っていると思う。

とはいえ、口にしないのは、以前言った所、ぶん殴られてしまったからだ。ちょっとからかったり、おっぱい鷲掴みにしても泣かなかったのに、あの時だけ鏡子が泣いたのを見てこの話題だけは封印している。

その代わり、セクハラが増えた気がする。

「あー、それはない。だって、お前よりいいおっぱいはないし」

「なーんで、そういうこと言うのかな？　この口がいけないかしら、ねっ」

「いひゃい、ひゃめて」

俺がセクハラ、鏡子が制裁を加えるのももう慣れてしまった。

……慣れって怖いね。今じゃ、制裁加えられても嬉しいのだ。でも俺が喜ぶのを知っているから制裁も厳しいものか短時間に終わるものになってしまっている。

関係がマンネリなのだ。

「やっぱり将来は都会に出たいよなあ。田舎は人が少ないから嫌だ……」

「あのね、こんな変態世に放てるわけないじゃない。だ、だから私が田舎で飼い殺してあげるって言ってるのよ」

それは、つまり俺の嫁になるということか。ふむ、ここはばっちりプロポーズを決めねばなるまい。だって、胸もお尻も大きいし、顔も好みなんだ。こんないい女、探すだけで人生に幕を閉じかねない。やっぱり都会に出るのやめようかな。

「で、少子化の話に戻るのだが、どうだ、２人で日本の合計特殊出生率増加に貢献しないか？」

「はあ？　もうちょっとまともな口説き文句があるでしょうに。０点、出直してきなさい」

０点ということは、今日はお預けという意味である。ちなみに俺の最高点は５０点。告白の時が最高点である。

好きだ、付き合ってくれ。

これが５０点。俺の普段の口説き文句がこれ以下っていうのは納得しがたいんだよなあ。ちょっとおっぱい触らせてくれとか、子供作ろうぜとかそういう普通のことしか言ってないのに。これが普段の俺であり、これからもその生き方を変えるつもりはない。男は皆変態。人類が誕生した時から変わることのない事実だ。

「そういや今でＦだっけ？　そろそろＧだな。俺はあまり好きじゃない」

「人の胸をゴキブリ扱いしないで。こんなに大きくなったのは、あんたが揉んだり、吸ったりしたりしたからしょうが」

この痴女幼馴染は教室でナニをのたまっているのだろう。俺達が喧嘩という名の乳繰り合いをするのは日常茶飯事だが、日頃のプレイの話はしたことない。不自然な姿勢になる男や俺だけをゴミを見

るような目で見る女。
ああ、俺の地位がまた下がっていく……。そう思うと段々とやけくそになってきた。
「胸が大きくなるのは、女性ホルモンのせいだろ。俺のせいじゃない！」
「関係あるわよっ。女性ホルモンの分泌が増えたのは、あんたのせいよっ」
そして、彼女の手が伸びて気付いた時には、投げ飛ばされてマウンドポジションをとられていた。
騎乗位ならいいのに。
「騎乗位ならいいのに。……あ、やべえ」
つい、本音が口から。
当然、鏡子は額に青筋を立てて、苦々しげに笑っていた。
「死に晒せっ！」
「ちょっ、待てっ！」
俺は必死で拳を止めようと両手を突き出した。これは死ねる。
でも、拳を止めることはできず、顔面に一発重いパンチが降って来た。
え？　じゃあ、俺の両手は？　あ、片手じゃつかみきれないし柔らかい。
嫌な予感がして顔面が痛いのをこらえ、恐る恐る鏡子の顔を見上げると、トマトほどに真っ赤に染まっていた。肩が震えて、その目

は怒りによって淀んでいる。狩猟者の目だ。見たことはないけど。

「うん、これは事故なんだ。許せ」

と言いつつ、数日ぶりに感じる彼女の胸を揉む。どうぜ、この後、しこたま殴られるんだもんなあ。結果が同じなら触らなかったら損だよね。

「ま、冥土の土産だもん。好きなだけ揉めばいいじゃない」

彼女もこう言ってるし、遠慮なく触るか。どうせ殺されるんだし。

「それにしてもさ。巨乳の何がいいんだか。あまり大きいと人目を惹くのよね。見てくれる人なんて1人でいいのに」

「巨乳はロマンだと思う」

教室内でマウンドポジションをとって、胸を揉まれる幼馴染（女）と、腹の上に乗った幼馴染の大きな胸を真顔で揉む俺。

それが普通に会話をしていて、周りがまたやってるといった様子で特に気にすることなく飯を食っている。俺が殴られるのは最早このクラスにとっては日常なのだ。

おっぱいを触りながら思う。

「忘れてはくれませんよね？」

ちょっと懇願もこもってる。

「そろそろ揉み飽きた？」

「い、いえっ、死ぬまで揉ませてください！」

何だろうね、俺弱すぎ。彼女強すぎ。鏡子のおっぱいは揉み飽きることはないけど、やめたらその時点で地獄逝き確定。やめられない、とまらない……。

それからたぶん、5分くらい経ったと思う。もう1回頼んでみる。

「その大きな胸くらいに寛大な御心で許してくれませんか？」

「揉みながら死ねば？　私は一向に構わないから」

「え？　なんで、パンチの準備？　ちょ、ちょっと！？」

あれ？　なんでだろう、おっぱい揉んでて嬉しいのに涙が止まらない。

待てよ、くらい言わせてほしかった。

「それじゃ、ばいばい。良い夢見なさい」

おっぱいや　ああおっぱいや　おっぱいや

辞世の句。小母内（こもうち）　秀明（ひであき）。

え？　この後？　当然のようにぼこられて俺は保健室行きになったさ。

ただ、起きたときに鏡子が何故か手を握って待っていてくれたのが心のオアシスのように思えた。

「本当にしょうもないわね。教室で人のおっぱい揉むからよ」

「しょうもない言うな。ああ、体痛い。ぎゅっと抱きしめてくれると俺としては嬉しい」

「はいはい、これいいの？」

しょうもないわねと、鏡子は笑って抱きしめてくれた。背中に当たるおっぱい最高ー。

「どうせおっぱい当たって最高なんて思ってるんでしょ？」

「……」

「せめてウソっていいなさいよ。まあ、いいけど。それよりも、明日、久々にデートでもどう？　普段は、あんたが変態で私はぶん殴って。たまには普通のラブラブなカップルに戻りたいと思わない？」

断る理由などどこにもありはしない。というより、これでもラブラブカップルのつもりなんだけど……。鏡子にとっては、違うらしい。

んっ、と大きく体を伸ばすとおっぱいが強調されて思わず視線が釘付けになる。鏡子はそれを目ざとく見つけると、単純ねとバカにしたように笑った。

「さて、それじゃあ、帰ろうか」

「家まで送っていこうか？」

「そりゃ当然よ」

そして、鏡子は俺の右腕に自分の腕を絡めて体重を預けてきた。たまにこういうことされるから、ドキッとするんだろうなあ。

「こんな暴力女は嫌い？」

「こんな変態男は嫌いか？」

そんなことを言い合いながら、家路へとゆっくりと向かった。

その帰り道、俺は暴力女は嫌いだ、と伝えておいた。
鏡子は変態男は嫌いだ、と伝えてきた。
だから、俺は彼女の家の前でもう1度伝える。こっちは本心で。

「俺は鏡子が好きなんだ。まあ、半分以上おっぱいだけどな」
「5点くらいかな。好きと言ってくれたことは素直に嬉しいけどね、おっぱいは余計。じゃ、また後でね」

何か月ぶりの、また後でね、だろう。
久しぶりに好きと言えたこと、それが今日の収穫だと思う。

それとおっぱい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5939i/

変態と暴力幼馴染

2011年1月20日14時55分発行